

令和6年度病虫害発生予察予報第6号(令和6年9月)

令和6年9月5日
高知県病虫害防除所

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量※
水稲 (普通期稲)	いもち病(穂いもち) 紋枯病 ごま葉枯病 ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ 斑点米カメムシ類	やや少(県下全域) <u>多(西)</u> 、平年並(中央部)、やや少(東、中西) <u>多(中央、中西、西)</u> 、やや少(東) <u>多(東)</u> 、 <u>やや多(中西)</u> 、平年並(中央)、やや少(西) やや少(県下全域) やや少(中央、中西)、少(東、西) やや少(県下全域) <u>多(県下全域)</u> <u>多(中央、中西、西)</u> 、 <u>やや多(東)</u>
カンキツ類 (温州ミカン)	そうか病 黒点病 ミカンハダニ	少(中央) <u>やや多(中央)</u> <u>多(中央)</u>
カンキツ類 (中晩柑類)	そうか病 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ	少(県下全域) <u>多(東、中央)</u> 、やや多(中西)、平年並(西) やや少(県下全域) やや多(中央)、やや少(東、中西、西)
果樹類	カメムシ類	多(県下全域)
促成ナス	フザリウム立枯病	<u>多(東、中央)</u> 、平年並(西)
野菜類	ハスモンヨトウ	<u>多(東、中西、西)</u> 、平年並(中央)

※ ()内の表記 東：県東部、中央：県中央部、中西：県中西部、西：県西部
 県東部：安芸市、室戸市および安芸郡の町村
 県中央部：高知市、南国市、香美市、香南市、長岡郡・土佐郡の町村、
 吾川郡いの町および高岡郡日高村
 県中西部：土佐市、須崎市、高岡郡(日高村を除く)町村および吾川郡仁淀川町
 県西部：四万十市、宿毛市、土佐清水市および幡多郡の町村

I 気象予報(高松地方気象台8月29日発表)

8月31日から9月30日までの天候見通し

<予想される向こう1か月の天候>

暖かい空気に覆われやすいため高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。降水量は、湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、平年並か多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率が80%です。

週別の気温では、1週目、2週目は高い確率が80%です。3～4週目は高い確率が70%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

期間	対象地域	要素	低い(少ない)		平年並	高い(多い)
1か月	四国地方	気温	10	10	80	
		降水量	20		40	40
		日照時間	30		30	40

<気温経過の各階級の確率(%)>

期間	対象地域	低い		平年並	高い
1週目	四国地方	10	10	80	
2週目		10	10	80	
3～4週目		10	20	70	

<予報の対象期間>

1か月：8月31日(土)～9月30日(月)

1週目：8月31日(土)～9月6日(金)

2週目：9月7日(土)～9月13日(金)

3～4週目：9月14日(土)～9月27日(金)

II 病虫害発生予想

1 水稻(普通期稲)の病虫害

1)いもち病(穂いもち)

予 想 発生量：やや少(県下全域)

根 拠

(1) 8月の調査では、穂いもちの発生は県中央部で見られたのみであり、平年と比べ発生面積は少なく、発生程度は平年並であった。葉いもちの発生は東部、中央部、中西部で平年並、西部で平年よりも少なく、発生程度はいずれの地域も平年以下であった。

(2) 伝染源となる葉いもちの8月の発生面積は県下全域で平年以下であったが、9月の降水量は平年並か多いと予想されていることから、感染に好適な条件が出現した場合には急激に発生が増加すると考えられる。

対 策

(1) QoI剤の使用回数は、耐性菌の発生を防止するため、作期を通じて1回とする。

2) 紋枯病

予 想 発生量：多(西部)、平年並(中央部)、やや少(東部、中西部)

根 拠

- (1) 8月の調査では、県中央部、中西部、西部で発生が見られ、発生面積は西部で平年よりも多く、中央部でやや少なく、中西部、東部で少なかった。発生程度は、いずれの地域も平年以下であった。
- (2) 本病は高温、多湿条件で発生が助長される。9月の気温は平年よりも高く、降水量は平年並か多いと予想されていることから、発生が増加し、発病株は上位葉鞘に進展すると考えられる。

対 策

- (1) 止葉まで発病すると稔実が悪くなり、減収するので、発生が予想される場合には薬剤防除を行う。

3) ごま葉枯病

予 想 発生量：多(中央部、中西部、西部)、やや少(東部)

根 拠

- (1) 8月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は県西部で平年よりも多く、中央部、中西部でやや多く、東部で少なかった。発生程度はいずれの地域も平年以下であった。
- (2) 登熟が進むと肥切れとなるため、発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 発生が多く見られるほ場では、冬期に客土や深耕により土壌改良を行う。

4) ツマグロヨコバイ

予 想 発生量：多(東部)、やや多(中西部)、平年並(中央部)、やや少(西部)

根 拠

- (1) 8月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は県東部で平年よりもやや多く、中西部で平年並、中央部でやや少なく、西部で少なかった。発生程度は、いずれの地域も平年以下であった。
- (2) 9月の気温は平年よりも高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くことから発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 出穂期から登熟期にかけて密度が高くなると、実入りが悪くなることがあるので、薬剤防除を行う。

5) ヒメトビウンカ

予 想 発生量：やや少(県下全域)

根 拠

- (1) 8月の調査では、県東部、中央部、中西部で発生が見られた。発生面積はいずれの地域も平年よりも少なく、発生程度は平年以下であった。
- (2) 9月の気温は平年よりも高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くことから発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 本虫による直接被害は少ない。

6) セジロウンカ

予 想 発生量：やや少(中央部、中西部)、少(東部、西部)

根 拠

- (1) 8月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は県中央部、中西部で平年並、東部でやや少なく、西部で少なかった。発生程度は、いずれの地域も平年よりやや低かった。
- (2) セジロウンカはほ場への定着性が低く、出穂期以降はほ場から離脱するため、発生は減少すると考えられる。

対 策

- (1) 出穂期以降に吸汁されると黒点米に似た被害粒が発生することがあるので、発生に注意する。

7) トビイロウンカ

予 想 発生量：やや少(県下全域)

根 拠

- (1) 8月の調査では、県中央部、中西部、西部で発生が見られた。いずれの地域も発生面積は平年よりも少なく、発生程度は平年以下であった。
- (2) 9月の気温は平年よりも高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くことから発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 本虫の密度が高まると坪枯れなどの被害を引き起こすので、今後の発生に注意する。
- (2) 株元に寄生するので、薬剤が株元に十分かかるように防除する。

8) コブノメイガ

予 想 発生量：多(県下全域)

根 拠

- (1) 8月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積はいずれの地域も平年よりも多かった。発生程度は県東部で平年よりも高く、その他の地域では平年以下であった。
- (2) 9月の気温は平年よりも高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くことから発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 出穂以降の食葉被害は減少すると考えられるが、止め葉の被害葉率が20%を超えると減収になるので注意する。

9) 斑点米カメムシ類

予 想 発生量：多(中央部、中西部、西部)、やや多(東部)

根 拠

- (1) 8月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は県中央部、中西部、西部で平年よりも多く、東部で平年並であった。発生程度はいずれの地域も平年よりもやや高かった。
- (2) 9月の気温は平年よりも高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続く

ことから発生が多い状態が継続すると考えられる。

対 策

- (1) 防除適期は出穂10日後頃およびその5～7日後であるが、糊熟期までにカメムシ類の発生が見られる場合には防除を実施する。
- (2) ミナミアオカメムシの発生が見られる場合は、合成ピレスロイド剤の効果が劣るので、他系統の剤(ネオニコチノイド剤等)を用いる。

2 カンキツ(温州ミカン)の病害虫

1) そうか病

予 想 発生量：少(中央部)

根 拠

- (1) 8月の調査では、発生面積は平年よりも少なく、発生程度は平年よりもやや低かった。
- (2) 9月の気温は平年よりも高く、降水量は平年並か多いと予想されているものの、定期的に果実の感染リスクが低いことから大幅な発生の増加はないと考えられる。

対 策

- (1) 窒素過多が発病を助長するので注意するとともに、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

予 想 発生量：やや多(中央部)

根 拠

- (1) 8月の調査では、発生面積は平年並、発生程度は平年よりも低かった。
- (2) 9月の降水量は平年並か多いと予想されており、発生は増加すると予想される。

対 策

- (1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生ができるだけ少なくなるように管理する。
- (2) 前回の防除以後の累積降雨量が250mm前後に達した時点で次の散布を行う。一般的には5月中下旬から7月上旬の間に3回程度、8月下旬から9月上旬にかけて1～2回散布する。発病の多いほ場では適宜散布回数を増やす。

3) ミカンハダニ

予 想 発生量：多(中央部)

根 拠

- (1) 8月の調査では、発生面積は平年よりも多く、発生程度は平年よりも高かった。
- (2) 本虫の増殖に好適な時期を迎えるため、発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 薬剤抵抗性の発達を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

3 カンキツ(中晩柑類)の病害虫

1) そうか病

予 想 発生量：少(県下全域)

根 抛

- (1) 8月の調査では、県東部、中西部で発生が見られた。両地域とも発生面積は平年よりも少なく、発生程度は平年並であった。
- (2) 9月の降水量は平年並か多いと予想されているものの、時期的にも果実の感染リスクが低いことから大幅な発生の増加はないと考えられる。

対 策

- (1) 窒素過多が発病を助長するので注意するとともに、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2)黒点病

予 想 発生量：多(東部、中央部)、やや多(中西部)、平年並(西部)

根 抛

- (1) 8月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は県中央部で平年よりも多く、東部でやや多く、中西部で平年並、西部でやや少なかった。発生程度はいずれの地域も平年以下であった。
- (2) 9月の降水量は平年並か多いと予想されており、発生は増加すると予想される。

対 策

- (1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生ができるだけ少なくなるように管理する。
- (2) 前回の防除以後の累積降雨量が250mm前後に達した時点で次の散布を行う。一般的には5月中下旬から7月上旬の間に3回程度、8月下旬から9月上旬にかけて1~2回散布する。発病の多いほ場では適宜散布回数を増やす。

3)かいよう病

予 想 発生量：やや少(県下全域)

根 抛

- (1) 8月の調査では、県東部で発生が見られ、発生面積は平年よりも少なく、発生程度は平年並であった。
- (2) 9月の降水量は平年並か多いと予想されていることから、発生はやや増加すると予想される。病原細菌は気孔や傷口から侵入、感染するので、台風の襲来後には更に増加し、発生が見られなかった地域でも発生が見られるようになると考えられる。

対 策

- (1) 銅剤等の散布による予防に努めるとともに、発病がみられる夏秋梢を剪定、除去する。

4)ミカンハダニ

予 想 発生量：やや多(中央部)、やや少(東部、中西部、西部)

根 抛

- (1) 8月の調査では、県下全域で発生が見られ、発生面積は県中央部で平年並、その他の地域では少なかった。発生程度は東部で平年よりもやや高く、西部でやや低く、中央部、中西部では低かった。
- (2) 本虫の増殖に好適な時期を迎えるため、発生は増加し、発生が見られなかった地域においても見られるようになると考えられる。

対 策

- (1) 薬剤抵抗性の発達を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

4 果樹類の病害虫

1) 果樹カメムシ類

予 想 発生量：多(県下全域)

根 拠

- (1) 県内4地点に設置したフェロモントラップにおける8月の誘殺数は、県下全域で平年を大きく上回った。

対 策

- (1) カメムシ類が山林で餌としているスギやヒノキの毬果が、吸汁や台風等の強風により落下した後に、餌を求めて果樹園に飛来してくることが予想される。園内をよく観察し、飛来を確認したら薬剤防除を実施する。

5 促成ナスの病害虫

1) フザリウム立枯病

予 想 発生量：多(東部、中央部)、平年並(西部)

根 拠

- (1) 前年に本病が発生したほ場では伝染源量が多いと考えられる。

対 策

- (1) 発病が見られ始めてから防除を実施しても効果は全く期待できないので、主要な感染時期と考えられる8~10月に定期的な防除を実施する。また、芽かき、収穫、整枝などによってできた傷口から発病するので、これらの作業が始まる時期に防除を開始する。
- (2) 前作の罹病残さは伝染源になるので、ハウス内外に放置せず、適切に処分する。

6 野菜類の病害虫

1) ハスモンヨトウ

予 想 発生量：多(東部、中西部、西部)、平年並(中央部)

根 拠

- (1) 8月のフェロモントラップへの誘殺数は、県西部で平年よりも多く、東部、中西部でやや多く、中央部でやや少なかった。
- (2) 9月の気温は平年よりも高いと予想されており、本虫の増殖に好適な条件が続くことから発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 卵塊や孵化幼虫が寄生している葉を見つけ次第除去する。
- (2) 薬剤防除を行う場合、発生初期の防除を心がける。
- (3) 施設栽培では、開口部にネット被覆を行い成虫の侵入を防止する。交信かく乱剤の利用も効果的である。

農作物の病虫害防除のための情報です。お気軽にご利用ください。

病虫害防除所ホームページ(こうち農業ネット)<https://www.nogyo.tosa.pref.kochi.lg.jp/?sid=2016>

- ①病虫害発生予察月報、病虫害発生予察予報
- ②病虫害発生予察注意報、病虫害発生予察警報、病虫害発生予察特殊報
- ③病虫害発生予察技術資料
- ④新しく問題となっている病虫害 etc.

高知県農薬情報システム <https://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/haishinfile/list/kochi>

- ①農薬の検索
- ②農薬データの一覧
- ③配信ファイルの閲覧(農薬安全使用、病虫害防除指針 etc.)